

# 農業新規参入者の文化人類学

## —北海道平取町における担い手意識に着目して—

文学研究科社会文化学専攻

小西 香菜

### 梗概

本研究の目的は、農業新規参入者に焦点を当て、平取町へ就農したことにより得られる変化について明らかにすることである。また、平取町の就農支援体制と農業体制を背景に、新規参入者が安定した農業生活を実現できる要因は何か、新規参入者と平取町との関わりについて分析した。対象者である農業新規参入者とは、非農家出身者が以前の職業を退職して新たに農業に従事する者を示す。

従来の新規参入者に関する研究は、個人の就農過程や営農内容について記されていたが、就農先の地域との関わりについての視点は明らかにされていなかった。農業の労働人口の減少や高齢化が懸念される現代において、新規参入者の生活への積極的な目線が必要である。そのため、本調査では新規参入者誘致に力を入れている平取町振内地域に就農した新規参入者を中心に調査をおこなった。

本研究では新規参入者の男女 9 名にインタビュー調査をおこない、その結果を 1 就農の動機、2 生活観の変化、3 労働観の変化、4 農業観の変化と 4 つのカテゴリーに分類した。インタビューの結果から、以下の知見に至った。1 新規参入者が地域への就農意識を決定づける要因として実現可能な就農体制の整った地域の存在が不可欠である。2 新規参入者は地域に農家として、住人の一人としての意識が生じることで人付き合いの重要性を認識するようになった。3 農家として働くことで労働と生活が交わり、農業が自身の生活の一部となった。また、目的意識をもって労働に取り組むよう意識が変化した。4 新規参入者は農業を営む上で様々な葛藤を抱いていた。

本研究により、新規参入者が平取町で得られた生活観、労働観、農業観の変化の背景には、農家として仕事である農業に取り組み、町の住人として地域活動にも関心を寄せ積極的に取り組む、この二つの側面からなる意識が関わっていることが明らかになった。また、平取町と振内町の新規参入者に対する支援体制がその意識をつくる要因となっていた。

農業の衰退は依然として歯止めがかかっておらず、農家の不安を払拭できるような対策が求められている。近年では農業の大規模経営化が顕著になり、農家の形態として小規模農家と大規模農家の二極化が進むと思われるが、小規模農家への目線は保ち続けてゆくべきである。小規模農家は大規模農家と比較すると生み出す利益は低いと思われるが、地域を活性化させる要員であると考えられる。平取町での調査を通じて、農家として、また地域住人として活動していた彼らの姿を振り返り、どちらか一方に偏らない目線が今後豊かな産業としての農業を導く要因の一つになると考える。